

原点に戻る！ そして今を原点に始める

練馬区立富士見台小学校 石川直彦

1997年12月に京都市の国立京都国際会館で開かれた第3回気候変動枠組条約締約国会議（地球温暖化防止京都会議、COP3）で同月11日に京都議定書は採択された。その年、私は江東区立枝川小学校で6年生を担当していた。「総合的な学習の時間」が始まる前であったが、当時受けもっていた6年生の子供たちと、地球温暖化をテーマにした学習も展開していた。容器包装リサイクル法が本格施行されたのが、1997年4月1日なので、社会全体が、エネルギーや資源についての環境行動に動き始めた「時」であった。その動きは、21世紀を迎え、2003年に「環境保全活動・環境教育推進法」が成立することによって一層、環境教育の指針が、持続可能な社会づくりに向け、明確に示されていくこととなる。

今振り返るとその当時（1997年）の子供たちとの実践は、「いきおい」があった。地球温暖化について学ぶことそのものが、新しい知識であったし、まだ、周りが知らないことも多いので、学んだことを人に伝え、広げていくことに学ぶことの意義を感じることができたのだろう。

いくつか印象に残っていることを紹介したい。朝の会での「今日のニュース」では、アルミ缶リサイクルが話題となった。それ以前にアルミ缶が作られるのに原料のボーキサイトから作るより、リサイクルして作るほうが、資源の再利用となるだけでなく、生産に使われる電気(エネルギー)が少なく済むことを学んでいた。それをきっかけに、近所でどのように缶がリサイクルされているかを調べ、その報告が発表されたのである。いくつかのコンビニを回って調べてみると、1つのコンビニだけは自社回収していると分かった。また、自販機横の空き缶入れも、1社の飲料会社だけは回収車が回ってくるということが分かった。この子供たちは、PTA活動で行っていたアルミ缶回収がどうして大切かを全校に伝えたり、学級活動で「町清掃」を行ったりした。

委員会活動でも、委員長として活動をリードした。体育委員会では地球温暖化をテーマにした新聞を発行した。物を作る時にエネルギーを使うので物を大切に扱うことが大事と伝え、体育倉庫のボール、竹馬をきちんと整頓しようというよびかけを行った。(写真1)

保護者の参観授業では、今自分たちができることをポスターセッションで伝えた。一人一人の思いは「伝えよう」という気持ちにあふれていた。そんな気持ちは、こどもメッセージとして伝えたいという気持ちへと高まり、環境作文での都知事賞の受賞へと結びついた。

今、改めて当時の掲示物の写真（写真2）を見ると驚く。掲示物には「環境問題を知るそして行動する（伝える・広げる・実践する）」と記されている。私自身が今現在実践しているエネルギー環境教育の原点は1997年の実践にあったのである。

よく「これからのエネルギー環境教育」について問われることがあるが、こうして考えてみると、目指す方向にこれまでも、これからも、違いはないのだと思う。教育においては、環境問題について知り、自らが行動していく態度を育んでいくことに変わりはないのである。

確かに、京都議定書以降の社会の動き、国のエネルギー事情の変化、さらに東日本大震災後の問題と時代による環境問題の変化はある。さらに東日本大震災以降、学校現場から「地球温暖化」に関する学習を耳にする機会が減ってきている。指導要領改訂により、総合的な学習の時間の授業時数が減ってきたことも影響しているだろうし、社会的に関心が薄れてきているようにも思われる。また、1997年当時の実践に比べ、最近の取り組みには子供たちから伝わってくる「いきおい」が少ない気がする。地球温暖化問題について耳にする機会が増え、省エネについても取り組んでいる家庭が増え、子供たちにとって環境問題は「伝えよう」という意欲にあふれにくくなっているようにも思われる。

そんな状況だから「これからのエネルギー環境教育」を問われるのだが、私にとって、それは新しいことを始めるのではなく、まず、1997年当時の子供たちが見せた環境問題と向かい合っていた姿を原点としてみたい。今の子供たちとの取り組みの中でも、その知識を獲得するときの方法や、行動し、実践していくための手だてを工夫して、子供たちからの「いきおい」を引き出していきたい。そして、その姿を新たな原点として社会全体がエネルギー環境教育への関心が広まるように広く発信していきたい。



写真1

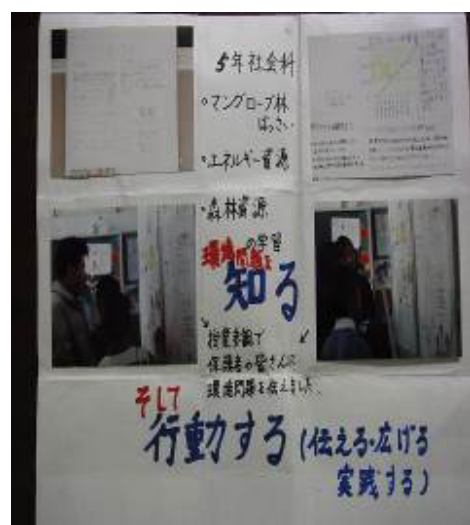


写真2